１．た・づ・な

競馬場の向こうに

社団法人　競走馬育成協会

副会長理事　**渡辺　脩**

十年ひと昔といいますから、もう四昔近く以前のことになります。私が競馬社会に身を置いた昭和 40 年代初頭の秋の頃、競馬場に入厩して間もない明け 2 歳馬（現在の 1 歳馬）が、馬房での銜（はみ）、腹帯、鞍など馬具装着馴致や当時、本馬場近くにあった小パドックでの調馬索による騎乗馴致に汗している厩舎人の姿をよく目にしたものです。その当時、若馬のブレーキングはまだまだ調教師の重要な仕事の一部であったように記憶しています。

現在のトレセン、競馬場へ新入厩する若馬は、当時と較べ入厩時期は遅くなったとはいえ、馬体の仕上がり、とり扱い易さ等に格段の違いがみられ、それら若馬の大部分が、来たるべき競走デビューに向けて概ね 8 分どおりの出来にあると見受けられます。

さらに、すでに競馬のローテーションに乗っている現役競走馬が、トレセンや競馬場と牧場を足繁く往き来する状況も、近年特に目を引く現象のひとつです。このことは、現在のトレセン入退厩延頭数が、ＪＲＡトレセンが東西２場になった 1980 年頃のおよそ 5 倍に増加していることからも頷けます。

さて、連綿と続く「強い馬づくり」の希求の中で、昭和 50 年代から軽種馬の生産、育成に関する振興対策及び技術の推進について、繁殖（交配）→生産→育成→調教→競走という競走馬のライフサイクルに沿った各ステージのあるべき姿と改善の方向が論議され、これを踏まえた種々の方策が時代、状況の変化に応じつつ今日まで継承実施されてきています。

こうした流れを通して、新たに若馬の後期育成、競走期にある馬の調整を専業とする牧場の創業や同一牧場内で育成部門を特化する牧場が生まれ、さらに各所に共同育成施設の創設をみるなど育成の分業化が促されました。このこと

は、それまでの馬づくりがやゝもすれば馬の資質の改良面と比べ育成技術の推進向上が軽視される風潮にあったものが、これを機に育成の大切さが改めて再認識されたことは、大変意義深く、競馬界全体にとって大きな収穫であったといえます。

現在、育成を主体とする牧場は大小 300 程を数えます。その経営形態は、預託馬を育成する受託専業型、繁殖生産と育成の兼業型、ピンフッカー的な育成販売型、さらにこれら業態の複合型など、実に様々です。経営基盤、資金力に相違はあるものの、育成業は馬づくりサイクルの中で、専門業種として定着した感があります。

生産ステージ（幼駒育成期）に続く育成者の仕事は二つに要約されます。

一つは、ブレーキングに始まるいわゆる育成後期の若馬の育成トレーニング。これは馴致作業、飼養管理、騎乗運動を通して各馬の持てる資質の開花に決定的な影響を与えると共に、人と馬の関係“相互の約束ごと”の構築時期でもあります。二つ目は競走期にある競走馬の心身のコンディション調整であり、次回出走を目標に、身体的なトレーニングだけでなくメンタル面でのリフレッシュを図り、更なるベストコンディション作りを目指します。

いずれも完成度の高い競走馬の安定的な供給には、欠くことのできない重要な役割を担っています。

ここのところ新馬競走において、初出走馬とは思えないしっかりした走りを見せる馬を多く目にします。また、古馬競走におけるレース間隔が 3 ヶ月以上空いた、いわゆる長期休養馬が好成績をあげるケースが以前に比べ多くなっている印象を強くしています。

これらの事象は、取りも直さず牧場での適切な育成管理と調教技術の向上を物語るものと確信する次第です。

今後とも、国内はもとより国際レベルでの競走で活躍するトップレベルの競走馬の層をより厚く、そして競馬をより熱くするため、育成者と同様に馬づくりの現場を預かる生産者・調教師と技術面・経営面について対等な立場での意見交換等を通してさらに連携を深め、所有者（馬主）・主催者等の協力を得て、斯界（しかい）が益々発展することを願って止みません。